

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：25405

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820050

研究課題名（和文） 藤原定家の書写工房における古典籍の書写に関する研究

研究課題名（英文） A Study of the manuscripts of Japanese classics transcribed in the atelier of Teika Fujiwara

研究代表者

岸本 理恵 (KISHIMOTO RIE)

尾道大学・芸術文化学部・講師

研究者番号：10583221

研究成果の概要（和文）：藤原定家が中心となり周辺の人々を動員して書写された古典籍、特に私家集を中心とした現存する資料の書誌的な特徴や本文の筆跡を分類した。これにより、定家を中心とした一連の古典籍書写活動がどのように行われていたかということ、またそこで書写された家集の特徴を明らかにし、こうして書写されたいわゆる定家監督書写本についての定義を修正する必要性を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research was an attempt to classify the bibliographical features and the characteristics of the handwriting in the manuscripts of Japanese classics, especially the ones transcribed by a group led by Teika Fujiwara. This investigation has uncovered how Teika and other members transcribed a series of classical works of literature and what characteristics Kasyu (a collection of 31-syllable Japanese poems composed by one person) had. Consequently, the necessity to modify the former definition of Teika Kantoku Shoshabon (the manuscripts supervised by Teika) has been suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 2011年度 | 420,000   | 126,000 | 546,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 1,120,000 | 336,000 | 1,456,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・国文学

キーワード：書誌学・文献学、藤原定家、古典籍、書写

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 藤原定家の書写と平安～鎌倉初期の文学作品

藤原定家(1162-1241)は『新古今和歌集』などの勅撰和歌集の編纂に当たるなどした鎌倉初期の著名な歌人であるが、歌の家の継承者として生涯に数多くの古典籍を書写したことで知られている。その写本は冷泉家

時雨亭文庫やその他各所に蔵されて現在に伝えられているものも数多くある。しかも、平安から鎌倉初期の文学作品、特に平安期など時代が古ければ古いほど、成立当初の原本とも言うべき写本が現存するものは無く、現在テキストとして広く読まれるものは、この定家が書写に当たった写本やその転写本である場合が少なくない。よって、平安・鎌倉

初期の文学研究にとって、定家の書写に関与した写本が重要なものとなっている。ただし、定家が精力的に書写したといっても1人の人間が書写できる分量には限りがあるため、定家は自らが書写するのみでなく、周辺の人々に書写させることで多くの古典籍の書写を果たしたということが明らかになり、しかもこの場合、定家はただ書写を任せるのではなく自らは監督に当たっていたため、こうした写本も本文としては定家の書写したものと同等の価値を持つことが認められている。

## (2) 古写本公開の動き・古筆学の成立

上記のことが明らかになった背景には1989年に『古筆学大成』(小松茂美・講談社)の刊行が始まるなどして古筆学の研究分野が確立したことがある。また、1992年に刊行が開始された『冷泉家時雨亭叢書』(朝日新聞社、2009年完結)などにより定家の書写に関与した古典籍が公開されるようになったことも大きい。そのような中で、定家が周辺の人々を動員して行った書写のあり方を「定家監督書写本」として定義付けられ、またそれらは私家集に多く見られるということが確認された。しかし、短い期間に大量の新出資料が公開される中であっては、これらの論が全体を概観するものであるか、あるいは個別の家集の内部的な特徴の指摘に留まっているのが現状であった。

## 2. 研究の目的

上記のように定家が書写に関与した資料は、平安・鎌倉初期の文学作品、特に私家集においてテキストとしても非常に重要であるにもかかわらず、どのような書写がされていたのか全体的な把握がなされていない状態での定義に依存するものであった。このことをふまえ、定家やその周辺の人々による書写活動がどのようなものであったのかということをも明らかにするのを第一の目的とした。

そのためにはまず、定家監督書写本として認定するための基準を明らかにすることを目指した。定家監督書写本とされる写本の中には、定家が冒頭や場合によっては途中の所々を書写し、周辺の人々の筆跡がその後を引き継ぐものや、明らかに定家と認められる筆跡で本文の訂正が書き込まれたものなど、定家の関与が明白なものがある。しかしその一方で、冒頭から定家の筆跡は認められず特徴ある定家の筆跡は本文にも書き入れや勘物などにも見出せないため、定家が関与したということが明確には認められないものもある。これらがどのような点をもって定家の工房で書写された本と認定できるのか、個人

の眼力や感覚によらない基準を見出し、どのような書写が行われ、どのような写本が作成されていたのか明らかにすることを目指した。これにより、現存資料が冷泉家時雨亭文庫やその他の図書館・資料館など各所に蔵されているがゆえに、それぞれの所蔵者から出版される影印本の解題や目録などで個別に解説される内容を統一的な基準をもって把握できるようになる。さらにこの基準を活用することで、古筆切や残欠本のように完本ではない形で現存する、もとは定家監督書写本として作成された資料についても、原形を復原する手がかりとなることも見込まれるものである。

## 3. 研究の方法

(1) 各所に分蔵される定家監督書写本について、その書誌的な事柄に注目して分類を試み、定家監督書写本の特徴を分析した。その指標として具体的には、①写本の大きさ、②表紙の料紙、③装丁方法、④外題、⑤本文の形態、⑥奥書・勘物・加筆訂正の有無を採りあげた。同じ工房の内で作成された写本であれば同じ料紙を用いて同じような装丁を施すことは容易に想定できる。このため、①や②・③の一致は工房における書写を客観的に確認することができる指標となる。⑤はつまり、1面の行数や1首を2行に分けるかどうかという書写の仕方、詞書の字下げなどである。これは個人の癖や時代的な特徴が現れやすい。⑥については、定家自らが監督作業として、周辺の人々による書写が終了した後の確認作業や完成への手順としてこのような書き入れを行ったと考えられるもので、監督者たる定家自らのものであるはずではあるが、写本によって分量の多寡があり、場合によってはほとんど無い場合まである。それが他の特徴とどのように関わるのか、その意味についても考察の必要があると考えた。

(2) 上記①～⑥については客観的な指標となりうるものである一方で、写本の一部でしかなかったり、写本によっては書き入れ等をもたなかったりする。また外題にいたっては後から付け替えられることも珍しくない。このため場合によっては、複数の写本を比較するに十分な指標を持たない写本もある。それを補うため、本文の筆跡のうち定家以外のものについてその分類を試みた。これにより定家の書写を支えた人物がどれほどいたのか、つまり工房の規模を知ることができる。また、現在は各所に分蔵される写本であっても、同じ人物による書写であることが判明することによって写本間の関係が明確となるほか、書写に関わった人々の活躍の様も想定できるようになる。さらには残欠本や古筆切な

ど不完全な形で現存する資料であっても、これら資料との筆跡の一致が確認できれば、もとは定家監督書写本から切り出されたものであるということが確認できるようになる。すると、現在では存在が知られていない定家監督書写本の存在を確認することにつながる。

(3) 現存する写本について、本文の書写にあたって定家と周辺の人物たちによる分担の様子や、周辺の人物同士の分担のありさま、また書き入れや勘物の有無・状態について、上記(1)(2)の分類に照らしながら、影印本の写真や実物の実験調査により1丁ずつ丁寧に確認をした。こうしたことについては既に解題などで指摘されている場合もあるが、それによって済ませることなく調査を実施した。

#### 4. 研究成果

(1) 定家監督書写本または定家等筆とされる写本について、書誌的な特徴や定家の書き入れ等の特徴、また本文に見える定家以外の人物の筆跡について分類し、少なくとも10余名の関与を確認した。

こうした資料を1丁ずつ丁寧に確認する中で、従来は同じ人物による書写と見なされていた資料についても別筆であることが確認できるものがあつた。『大齋院前の御集』(日本大学総合学術情報センター蔵)は上下2巻を1帖に合綴されており、上下巻それぞれに冒頭部分が定家の筆、後を周辺の人が書き継ぐ書写となっている。この定家の後を書き継ぐ筆跡について、上下巻ともに同一人物とみなされてきたが、実は別の人物であることが判明した。しかも、それぞれに別の定家監督書写本私家集に同筆資料が確認できることから、定家の工房において定家の監督の下、それぞれの人物が重層的に活躍していた様子が確認できる。

また、『大齋院前の御集』下巻は冒頭を定家が書写した後に周辺の人物の筆跡となるが、巻末の約6丁のみはさらに別の人物によって書き継がれることが知られていた。こうした定家以外の人物同士による分担状況についてはこれ以外に知られていなかったが、新たに『伊勢大輔集』(冷泉家時雨亭文庫蔵)においても同様の書写がなされていることを確認した。『伊勢大輔集』の場合は冒頭から定家の筆は見られないもので、全丁が周辺の人物による書写である中で、途中の約2丁のみに別の筆跡が認められ、その後はまた冒頭と同じ人物に戻っていることが判明した。定家監督書写本の中で、本文に定家の筆跡を含まず周辺の人物1筆により書写されたものは複数知られてきたが、周辺の人物が複数

名関わったものは確認されていなかった。このことは、定家の監督としての関与のあり方を示唆するとともに、定家が監督書写という方法を採用にあたり参考にしたと考えられる父俊成の工房においては確認されてきたことであるので、俊成工房との共通点が新たに確認できたことになる。

『有房中将集』(冷泉家時雨亭文庫蔵)も、本文には定家の筆跡が見られない家集であり、勘物も無く、外題やわずかにある書き入れも定家とは断定できない状況で、つまり定家の関わった痕跡がはっきりとは確認できない。従来この家集の本文の筆跡について「少なくとも3筆ある」とされてきたが、それがどのような人物であるのか具体的などころまでは指摘されないままであつた。しかし、調査を進める中で、本文の筆跡は2筆で2回ずつ入れ替わる(つまりA→B→A→B)状況であることが判明した。この2筆とも定家監督書写本の中に同筆資料を見出すことができ、しかもそれはいずれも冒頭を定家が書写した後を書き継いでいることから、それぞれの人物が定家の書写工房で書写をしていたということである。すると、『有房中将集』は定家が関与した痕跡を持たないながら、定家の書写工房で書写されたものであることが明らかである。

このことは、定家が直接的には筆を染めないという活動があり得た、つまり、定家がやや間接的な関わりしかしなくても他の私家集と同様の価値をもつ写本を作成できたということである。とすると、定家監督書写本の概念を従来よりも拡大して考えることが必要ということである。しかも、上記の『大齋院前の御集』、『伊勢大輔集』、『有房中将集』において、定家の周辺人物同士で本文が書き継がれるものに見える筆跡は相互に重なっており、定家の工房内における人々の活躍の様をも示唆しているものである。

(2) 現在は零本の形で伝わるいわゆる「伝西行筆和泉式部統集切」について、書写された当初の形を復原した。この集の伝存状況は、一部は古筆切となり、あるいは散逸し、その他まとまって残るものは2帖に分けて綴られている。その2帖には「高遠大弐集」「大弐三位集」の外題が付され、しかも各帖内で、あるいは相互に入り交じる形で錯簡や乱丁を複雑に起こしているため、全体像は明らかでなかった。本文の筆跡は伝西行筆とされながらも西行の真跡でないばかりか、同筆資料である『散木奇歌集』(冷泉家時雨亭文庫蔵)が定家監督書写本であり、その定家の書写奥書が西行没後の「安貞2年」となっていることから、この集は定家の書写工房において書写されたことが既に明らかになっていた。

これについて、現存する箇所錯乱状態を

分析し、それがいかに引き起こされたものであるのかについて考察するとともに、これまでの調査により明らかになった、定家の書写工房において制作された他の私家集の形態の特徴を当てはめることで、現在は散佚した部分の丁数も含めて、書写当初の形を解明することができた。

こうした方法は、他の残欠本にも応用することができるものであり、不完全な形でしか現存しない資料についての研究を今後進めていくことが期待できるものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 岸本理恵、「藤原定家の書写活動と『有房中将集』」、『尾道大学芸術文化学部紀要』第10号、2012・3、pp3～8、査読無
- ② 岸本理恵、「藤原定家の書写活動と『大斎院前の御集』」、『尾道大学日本文学論叢』第7号、2011・12、pp37～47、査読無  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/9805>
- ③ 岸本理恵、「伝西行筆和泉式部続集の原形」、『尾道大学芸術文化学部紀要』第10号、2011・3、pp4～14、査読無  
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/9309>

[学会発表] (計2件)

- ① 岸本理恵、「藤原定家の書写活動と『有房中将集』——冷泉家時雨亭文庫蔵『有房中将集(定家本)』をめぐる——」、和歌文学会 第107回関西例会、2011年12月3日、京都府立大学
- ② 岸本理恵、「藤原定家の書写工房における私家集書写活動——『大斎院前の御集』を手がかりとして——」、尾道大学日本文学会、2010年12月5日、しまなみ交流館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岸本 理恵 (KISHIMOTO RIE)  
尾道大学・芸術文化学部・講師  
研究者番号：10583221